

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ **鬼無から飯田を歩く**

講師 川崎 正視（高松市文化財保護協会事務局長）

日時 平成30年4月22日(日)



共催

高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

1 鬼無・弦打

○鬼無

現在の鬼無、香西、下笠居の三地区は、藩政時代から明治二十三年（一八九〇）までは香川郡西、笠居郷、笠居村であった。町村制施行により、明治二十三年に上笠居村、中笠居村（後に香西町）、下笠居村に分かれた。上笠居村は、昭和三十一年（一九五六）に高松市へ合併して、鬼無町となった。鬼無町の名称は、元々上笠居村の最も南にある大字鬼無からきている。大字鬼無の街は、旧丸亀街道と御厩道が同じ道として通り、高松から最初の宿場町として当時の村の中心地で、現在そこは鬼無町鬼無となっている。

鬼無町は、南から鬼無町鬼無・鬼無町山口・鬼無町佐藤・鬼無町藤井・鬼無町佐料・鬼無町是竹の六地区からなる。

小学校も合併により上笠居村立上笠居小学校から高松市立鬼無小学校となった。

○鬼無駅

明治三十年（一八九七）、讃岐鉄道が丸亀から高松（旧駅・中央図書館北側付近にあった）に延伸したときに開業した。その後、明治三十七年に山陽鉄道、明治三十九年に国有鉄道

となる。そして、昭和六十二年（一九八七）四月、国鉄分割民営化により、四国旅客鉄道株式会社となる。

昭和四十二年、鬼無く香西、昭和四十五年、鬼無く端岡の間が複線化されるまでは、上下とも単線で、駅構内は三線あり、上り下りの列車が行き違いできるようになっていた。当時の三線ホームが部分的にまだ残っている。駅北側の踏切が、村の名前が唯一残る上笠居踏切である。

鉄道近代化の歴史

昭和二十八年（一九五三）十月に気動車化が始まる。

昭和四十三年四月に鬼無を通る蒸気機関車がなくなり、昭和四十五年（一九七〇）四月には四国から完全になくなって、無煙化が完成した。

昭和六十二年には、高松く観音寺、多度津く琴平の間が電化した。

昭和六十三年四月十日に瀬戸大橋開通により、列車の流れも一変した。

○御厩（みまや）道（＝香西道）

鬼無駅前を南北に走る道。駅の北側の上笠居踏切を通して北の香西港に至る。御厩道は

鬼無駅南方五百メートルの下鬼無で旧丸亀街道と合流し、さらに南七百メートルの上鬼無から南東の御厩へ、円座から香川郡南部へとつながる。郡内から御厩焼、七輪などの産物が香西港へ、香西港からの雑貨・肥料などが香川郡内へ、荷馬車などが行き交った。

現在も下鬼無から上鬼無の間は、宿場町の街並みの名残りが窺える。

○大古家(おおふるや)

鬼無町安徳(あんとく)の御厩道と四国遍路道の交差点にある家の屋号。橋本仙太郎の桃太郎の話の中で、おじいさんとおばあさんが住んだ屋敷とされている。また、源平屋島の合戦の当時、寿永三年(一一八四)安徳帝の行幸があったところと伝わる。屋敷内に安徳帝が使用した井戸「安徳の井戸」がある。

※鬼無・桃太郎伝説

元上笠居小学校の先生であった橋本仙太郎が、昭和六年(一九三二)に「鬼無伝説桃太郎さん 鬼ヶ島征伐」を出版した。鬼無近在や女木島などの地名や人名をあげて、鬼無版・桃太郎伝説ばなしを発表した。

・お爺さんが芝刈りに行ったのが芝山。お婆さんが洗濯にいったのが本津川。

犬は犬島の人々。猿は綾川町猿王の人。雉は鬼無雉ヶ谷の人々。威嚇のため弓の弦を鳴らしたのが弦打・弦打山。鬼の屍を埋めたところが鬼無の鬼ヶ塚。などなど

○四国遍路道

第八十二番札所根香寺から第八十三番札所一宮寺を結ぶ旧遍路道は、根香寺から鬼無、そして飯田を通り、香東川を歩いて東に渡って、一宮寺に至る。鬼無では赤子谷からヒウ千坂を越えて高松西高校を経て鬼無駅南の踏切に。大古家前の交差点から安德墓地（一宮まで六十七丁の道標あり。この地点が根香寺と一宮寺のほぼ中間点である。）の東側を通り、道端（みちばた）で旧丸亀街道を横切り、本津川の接待橋（現在は永代橋）を渡ると飯田、そして岩田神社に至る。

岩田神社からは二ルートに分かれ、一つは東に進んだ後、辻地蔵から南に曲がり代官道を進む。もう一つは、岩田神社から南進して参道を進み、御旅所から東進して代官道に合流する。その後は田んぼの中を南東方向へ、夫婦塚（みよとづか）出水からの用水が飯田地区内に分かれる四ツ又からは飯田用水に沿って進み、檀紙町に入り、夫婦塚墓地の所で香東川（ごうとうがわ）左岸に出る。

真念の貞享（じょうきょう）四年（一六八七）に出版された「四国遍路道指南」の根香寺

と一宮寺の間について、「是より一宮迄二里半、しるし石有。山口村〇飯田村、八まんの宮
過てかうどう川。小山村〇成相村。」と記されている。

※盆栽の歴史

盆栽の技術は、文化年間（一八〇四〜一八）に始まった。接ぎ木の名人から学んだ鬼無半
山が、植木盆栽の技術を独学で習得し、幕末から明治の初めにかけて、苦心の末、成功し
て生まれたものである。明治の中頃になって、品質を改善し良質の苗木をつくりあげ、宣
伝によって販路を拡大して、鬼無は盆栽の大生産地となった。

大古家の前の安徳墓地には、鬼無の盆栽振興に尽力した「鬼無半山」の墓がある。

〇道端（みちばた）から接待橋（永代橋）へ

道端は、四国遍路道と旧丸亀街道が交差する当たりの地名
で、交差点に文政元年（一八一八）に建てられた「これよ里一
のみや」の道標がある。遍路道を入りすぐに地蔵堂がある。
地蔵堂には遍路が時々泊るといふ。地蔵堂の前の道は未舗装
で昔の姿がよく残っていて、接待橋（永代橋）へと続く。



○弦打(つるうち)

町村制の施行により、明治二十三年(一八九〇)にいずれも香川郡西、飯田郷の飯田村、鶴市(つるいち)村、郷東村の三村が合併して弦打村ができた。御殿山(石清尾山)から浄願寺山にかけての山の形が弓のようで、全体、御殿山・浄願寺山それぞれ単体でも弦打山と言っていた。山の名称を合併後の村名とした。昭和三十一年(一九五六)高松市に合併後は、飯田町、鶴市町、郷東町となっている。現在の弦打小学校は、弦打村の時と同じ小学校区である。

2 飯田

○飯田(いいだ)

地名の飯田の範囲は、大きなエリアとしての飯田郷と小さなエリアの飯田村(現在の飯田町)がある。江戸期には、飯田村・鶴市村・郷東村・檀紙村の四か村合わせて飯田郷と呼んでいて、岩田神社がその産土神であった。

現在の飯田町は、元の飯田村の地域からなっており、西は本津川を境に鬼無町(旧上笠居村)と、南は、友常池、半田池などを境に檀紙町と、東は香東川を越え浄願寺山(弦打山、東山)の稜線を境に鶴尾地区と、北は鶴市町に接している。

飯田村は、檀紙町で南バイパス・中森大橋の北の香東川（ごうとうがわ）左岸にある夫婦塚（みよとづか）出水と、檀紙小学校南東の古川堰（上流に奈良須池と小田池がある）からの二系統の水源を利用して田を耕す村落共同体である。

※別添 水系図参照

○接待橋・卒塔婆・あごなし地蔵

橋の手前が、鬼無桃太郎伝説では、お婆さんが洗濯をしていた所だとしている。

第八十二番札所根香寺から第八十三番札所一宮寺への遍路道は、接待橋（永代橋）を渡ると飯田に入る。渡った所で昔は遍路のお接待が行われていたことから、接待橋の名前がついた。接待橋は川の中に板を渡したような簡単な橋であったが、昭和二十八年（一九五三）に本格的な橋が架かったときに、この場所が土砂加持で永代経を勤める場所でもあったことから、永代橋と名をかえた。

渡った右岸には流水灌頂（ながれかんじょう）の卒塔



婆とあごなし地蔵がある。溺死人などを弔うための流れ灌頂が行われていたことから卒塔婆が建立された。あごなし地蔵は、齒痛に御利益があるという。また、このお地蔵さんの顎を削って持っていれば、勝負ごとに勝てるとの民間信仰があった。

○岩田神社

治承二年（一一七八）の創祀と伝わっている。一つには、寒川郡の宝蔵院（現長尾寺）の朝算法師によりこの地に祀られたとされている。また、保元の乱（一一五六）に敗れた崇徳上皇が讃岐に流されたときに同行した唐渡左門雅基の子信宗が、上皇崩御の後、飯田郷に移って岩田神社を勧請したとも伝わっている。祭神は、応神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三神のいわゆる八幡三神である。一般に「飯田の八幡さん」とも呼ばれ、元の飯田郷の飯田・鶴市・郷東・檀紙、さらには御厩の産土神（氏神）で、郷社でもあった。

明治の神仏分離まで、蓮香寺（れんこうじ）が神宮寺（別当



寺)として長く神社を守ってきた。分離以前、蓮香寺は神社のすぐ西側にあつて、本津川までの広い境内であつたという。神仏分離で、元の御神体(阿弥陀如来)は、飯田町定木にある光明寺に移され、古宮さんと呼ばれている。

★孔雀藤

今回のふるさと探訪は、孔雀藤の開花に合わせて実施を計画した。晩春から初夏を彩る「孔雀藤」は、ヤマフジの一種で、樹齢は八百年といわれている。昭和四十六年(一九七二)に香川県の自然記念物に指定されており、藤棚が一〇・八メートル×二十四メートルあり、花房は最長二メートルに及ぶ。今年の「ふじまつり」は、四月二十一日から五月三日に開かれており、岩田神社の春の大祭が期間中の四月二十六日に行われる。

※イスノキ

拝殿の西側で社務所北側の奥まった所にある。特徴は葉に丸く突出したコブがあること。昭和五十二年(一九七七)に高松市の名木に指定された。



○飯田の観音さん(蓮香寺)、高地蔵

岩田神社の直ぐ南側、参道右手に観音堂がある。親しみを込めて「飯田の観音さん」と呼ばれている。岩田神社の別当寺、元の蓮香寺(れんこうじ)の名残りで、本尊・千手観音が祀られている。以前は地元のお年寄りやお遍路さんの休憩所としてよく利用されていた、

北隣には、檀紙の旧家が牛の供養のために建立した高地蔵があり、昭和三十年(一九五五)代の半ばまでは、旧暦四月十日に牛の健康を願って、牛にお経一卷を読み聞かせる大般若という行事が行われていた。

○唐人塚

「葬唐人八員墓」の石碑の周辺に古い五輪塔数基がある。名称は大陸人の墓の意味であるが、次のような伝承がある。

文禄の役(一五九二〜一五九三)に出兵した生駒親正・一正が朝鮮半島から何人もの捕虜を連れて帰ってきたが、その内



の八人が飯田の唐戸（渡）氏のもとに配流されたとも、また、朝鮮征伐のときに唐戸氏が唐人八人を召し連れかえったとも言う。八人は将来を案じたか、恥を忍びきれなかったのか、自殺を遂げた。土地の人々は彼等をあわれみ、唐戸（渡）家墓地の一隅に墓をたて葬ったという。さらに、捕虜たちの墓はこの辺りに点在する小塚であるとも言う。

また別の言い伝えでは、朝鮮征伐のときにやってきた捕虜は本国に帰らず飯田・小坂の地にも来た。郷土久左衛門など村の人々の世話で付近の農家などで働いていたが、朝鮮人たちは流行の伝染病にかかって死亡したので、墳墓を造って吊ったとも言われている。

○飯田城（いいだじょう）

中山城山の全讃史（文政十一年・一八二八）には、中世の弦打に飯田城と筑城（つづき）城



の二城があり、飯田城には飯田主水及び飯田右衛門大夫がここに居たと記されている。飯田主水は、南北朝時代に北軍の細川頼之に属する近臣で、香川郡飯田邑の城主だった。飯田主水は康暦（こうりやく）元年（一三七九）の細川頼之が伊予・河野通正の生子山城（しようじやまじょう・新居浜市）攻めた際に参戦し、勝ち戦とした。

また、飯田右衛門大夫は飯田主水の子孫であると思われる、戦国時代に香西氏の武将として活躍した。天正十年（一五八二）の長宗我部との戦にも参戦した。そして、秀吉の侵攻による香西氏下野の後、属した武将たちは散り散りになった。飯田伝右衛門は天正十五年（一五八七）、禄二百石で生駒親正に召し抱えられた。

唐人塚から南約百メートルにある茶臼塚は、飯田氏の祖先を祀った塚であると伝えられている。

現在、飯田城の城跡らしい地形は見つかっていないが、飯田城が定木にあつたとの資料もある。字名の飯田町南東端にある定木（じょうぎ）は、読みから、じょう城、ぎ城と城に通じる地名である。また、飯田の定木、青木（あおぎ）、小坂（こさか）一帯には、小塚が多く点在しており、中には中世の武将の墓とも言っているものがある。最近、宅地開発が一部で進んでおり、塚の発掘などで飯田城の場所の判明が期待される。

○賽神社(サイノカミ)

岩田神社から遍路道を東に約三百メートル進んだ所にある。寛文年間(一六六一〜七三三)に当地の唐戸與五右衛門尉友常が、村民の幸福を願う神として幸(さい)の神を祀ったと言われている。昔は拝殿を持った神社であった。

○辻地蔵・代官道

賽神社の東隣りの遍路道と代官道の交差点Ⅱ飯田村の真ん中にあるお地蔵さんが辻地蔵である。寛文年間(一六六一〜七三三)、飯田村の唐戸與五右衛門尉友常は、飯田の小坂から定木、檀紙の大將軍(だいじよご)を通る南北の当時の幹線道である代官道をつけたのを始め、道路を縦横一丁ごとに貫通させ、その道路に沿って水路を設けるなど道路や水利灌漑を整備し、さらに友常池も造って村人のために尽力した。村人は友常の死後、村の中央の四つ辻の路傍に葬って地蔵を建てた。これが辻地蔵であるという。

代官道に沿った水路は、小田池・奈良須池からの水が、檀紙の古川堰から大將軍を経て真っ直ぐ北進する水路である。

○淤加美(おかみ)神社

飯田町・青木に雨の神様が祀られている。岩田神社の末社である。秋山忠著「古城跡を訪ねて」には、飯田城の探索において、「リンゴンさん」と呼ぶ祠として登場し、付近の馬塚は「なにやら由緒深そうな気配」と記され、周辺の小塚と併せて飯田城跡発見の糸口の一つとも述べている。

3 香東川・霞堤

○香東川(弦打、旧市街など下流では、「ごうとうがわ」と呼んでいる。郷東川と記す場合もある。)

西嶋八兵衛が香南町大野で香東川の東の流れを堰き止め、現在の西側の流れに統一したのは、寛永十四年(一六三七)のことである。それ以来、高松城下など香東川東の右岸は良くなつたが、香東川西の左岸は、度々、川の氾濫による洪水に見舞われてきた歴史がある。香川町大野の対岸である川部町から下流の左岸は、洪水によって削られた河岸段丘崖が連続して見られる。また、洪水対策としての霞堤があつて、堤防がつながっていない所が数



か所ある。

○大明神(出水) (だいまみょうじん)

岩田神社の前を東へ進み香東川(ごうとうがわ)に接した所にある出水。出水からの水は、北西に流れ鶴市町の南部・中部を潤す。

香東川左岸には、ウズメと呼ばれる取水口(出水)が距離を置いて上流から下流まで造られており、弦打に関するものでは、南から夫婦塚(みよとづか)出水、大明神出水、井(どんぶり)出水、郷東の堰がある。

○霞堤 (かすみてい) (飯田町・青木IIあおぎ)

大明神出水のすぐ南側は、堤防が下流から上流には繋がっておらず開口している霞堤となっている。右手奥の陸地側が遊水地となっていて、遊水地のさらに右手西側は河岸段丘崖が続いている。



大明神にある碑

ムラ、村の境・・・飯田の辺りでは

・飯田村と鶴市村の境は、用水・水利と関係している。大明神出水、高月池（こうづいけ）から用水路を通じて水を引く田んぼが鶴市村。それより南が飯田村・・・このルートを歩きます。

参考までに

・檀紙村と飯田村の境は、同様に出水などの水源が異なる。飯田の水源は香東川の左岸にある夫婦塚（みよとづか）出水からと古川（本津川支流）にある堰から、いずれも檀紙町内を長く流れて、飯田にやって来る。その水を飯田の水田が利用している。境は水路を隔てて上で、南側が檀紙となっている。

・鶴市村と郷東村

鶴市村への出水は、大明神出水の下流に、井出水があつて鶴市町北部を潤す。さらに下流に郷東の堰があり、郷東町の耕地に水を引けるようになっていて、その境が元の村境である。

○霞堤（かすみてい）（鶴市町・相作IIあいさこ）・・・遠くから見ます

大明神から香東川左岸堤を下流に約七五〇メートル進むと、また、堤防がつながってい

ない霞堤がある。今は香東川沿いの自転車道の橋が架かっており、開口部を見落としそうである。

○高月池(こうづいけ)

貯水量八・五万トン。鶴市町の水田を潤す。現在、ハクチヨウがいることで有名である。仁和二年(八八六)より讃岐の国司に任じられていた菅原道真がこの池に舟を浮かべ、弦打山(浄願寺山)の月を賞したので、この池を高月池という伝説がある。また、南の堤防に石碑があり、室町時代末期の連歌師・宗祇法師の作とされる「弦打の山より出ずる月影は弓張りところ言ふべかりけれ」が刻まれている。池から望む弦打山(浄願寺山)を詠んだもので、山が弓を張った形をしていて、弦打の地名の由来とも言われている。



4 相作馬塚古墳

○相作馬塚古墳(あいさこうまづかこふん)

高月池の北近くの標高は約十五メートルの場所にあった。

発掘前は塚の上に平成六年(一九九四)銘の石製祠があった。平成二十八年六〇八月にかけて発掘調査が行われた結果、古墳時代中期(五世紀後半)の古墳を、中世と近世(十八世紀)に形状を変更して塚としていたことが分かった。古墳時代中期の古墳には直径十五メートルの円墳に突出部がついており、周濠があつて、円筒埴輪列や馬形埴輪がみられ、竪穴式石室も発見された。石室は未盗掘で大きさは長さ三・二メートル、幅〇・六〇・八メートル、高さ〇・六メートルであり、碧玉製管玉十点、太刀、短甲、冑(かぶと)、須恵器・



土師器、鉄製矢尻、かすがいなどが発見された。中世には塚があり、古墳北側斜面に石造物や蔵骨器が配置された場所が三ヶ所確認された。

残念であるが、宅地開発のため元の形は残っておらず、今は団地内のミニ公園になっている。

※相作牛塚古墳(あいさくうしづかこふん)・・・遠くから見ます

相作馬塚古墳の北方約百メートルにある。昭和四十八年(一九七三)、運送会社の敷地造成で古墳であることが確認された。墳丘がかなり壊された状態の調査であったが年末には完全に削平された。高さ二メートル直径十四メートル以上の円墳で竪穴式石室があった。円筒埴輪・形象埴輪、須恵器、鉄製品(武器・馬具)が採集され、遺物の検証から六世紀前半を中心とした時期に築造されたと推測されている。

すぐ東側に江戸時代の初めころにあった円光寺の守り神として祀られていた相作(あいさく)神社がある。荒神さんとも言っている。祭日は十月十二日。宵祭りには夕刻から約四時間、お神楽が奉納されていたが、昭和十七年(一九四二)以降、戦争が原因で途絶えている。ここの神楽が郷東にある香東(ごうとう)神社に伝わったという。別名、大康森神社(おごもりじんじや)。

○大暮(おぐれ)神社・王墓

弦打小学校から南西約三百メートルのところに、高さが約三メートルの小高い土盛りがある。また、相作馬塚古墳からは北西約四百メートルでもある。この土地は、昔から丘陵状になっていて周りに堀がめぐらされていた。今は堀が埋められ、耕地などとなっている。これら周囲の状況から古墳と思われる。丘陵上には、「丸石三個を祀る祠」と「王墓」の墓石に「安政三年(一八五六)これを建つ」がある。大国主命(おおくにぬしのみこと)、少彦名命(すくなひこなのみこと)、神櫛別命(かみぐしわけのみこと)を祀る大暮(おぐれ)神社である。また、すぐ隣には自然石で「社稷五大神」(地神さん)も祀られている。弦打風土記には、「大昔大墓の北方に西宸堂



(にしんどう)という寺院があり、重仁親王が住んでいたと伝えられ、この王様の墳墓が王墓で、後に大墓の字を用いるようになった。そして、この墓に明治五年(一八七二)に祠を立てて、三柱を祀った。」と記されている。

丘陵の東端には、東の山に向かって水分神社(みくまりじんじや・リュウゴンサン)の遥拝所が設けられている。

○旧丸亀街道・金毘羅燈籠

天正十六年(一五八八)生駒親正は、高松城から丸亀城を結ぶ道として、丸亀街道を整備した。弦打あたりでは、郷東の渡しで香東川を渡り、中津の一里松(一里塚)から旧本津川に沿ってつけられたと思われる道を斜めに南西に進み三軒家(現在の市道木太鬼無線と本津川右岸堤防が交わった所)へ竹林へ本津川へ鬼無のまちへ衣掛へと進んだ。大暮神社から本津川に出た辺りは、昔は堤防沿いに竹藪があつて、竹林(たけばやし・地名)と呼ばれていた。川の拡張と堤防の整備で竹林はなくなった。

旧丸亀街道は金毘羅街道を兼ねていて、竹林の川沿いには石づくりの寛政九年(一七九九)建立の金毘羅燈籠がある。本津川橋は架けかえられており、今の本津川橋より北へ五十メートル程の所にあつた。さらに、本津川を渡って西側堤防を約四百メートル、鬼無駅東

方四百メートルにも金毘羅燈籠があり笠居村中と記されている。上笠居村になる前の明治二十三年（一八九〇）より前に建てられた金毘羅燈籠である。この燈籠は、以前、本津川橋を渡って五十メートル程の西に通じる道との交差点にあったそうである。

現在の県道三十三号坂出国分寺高松線が、国道十一号線として開通した昭和二十八年（一九五三）以降、旧丸亀街道は旧道と呼ばれるようになった。

参考文献

「ふるさと鬼無」 鬼無連合自治会発行、二〇〇七年

「知る学ぶ弦打歴史散歩」 弦打校区コミュニティ協議会発行、二〇一七年

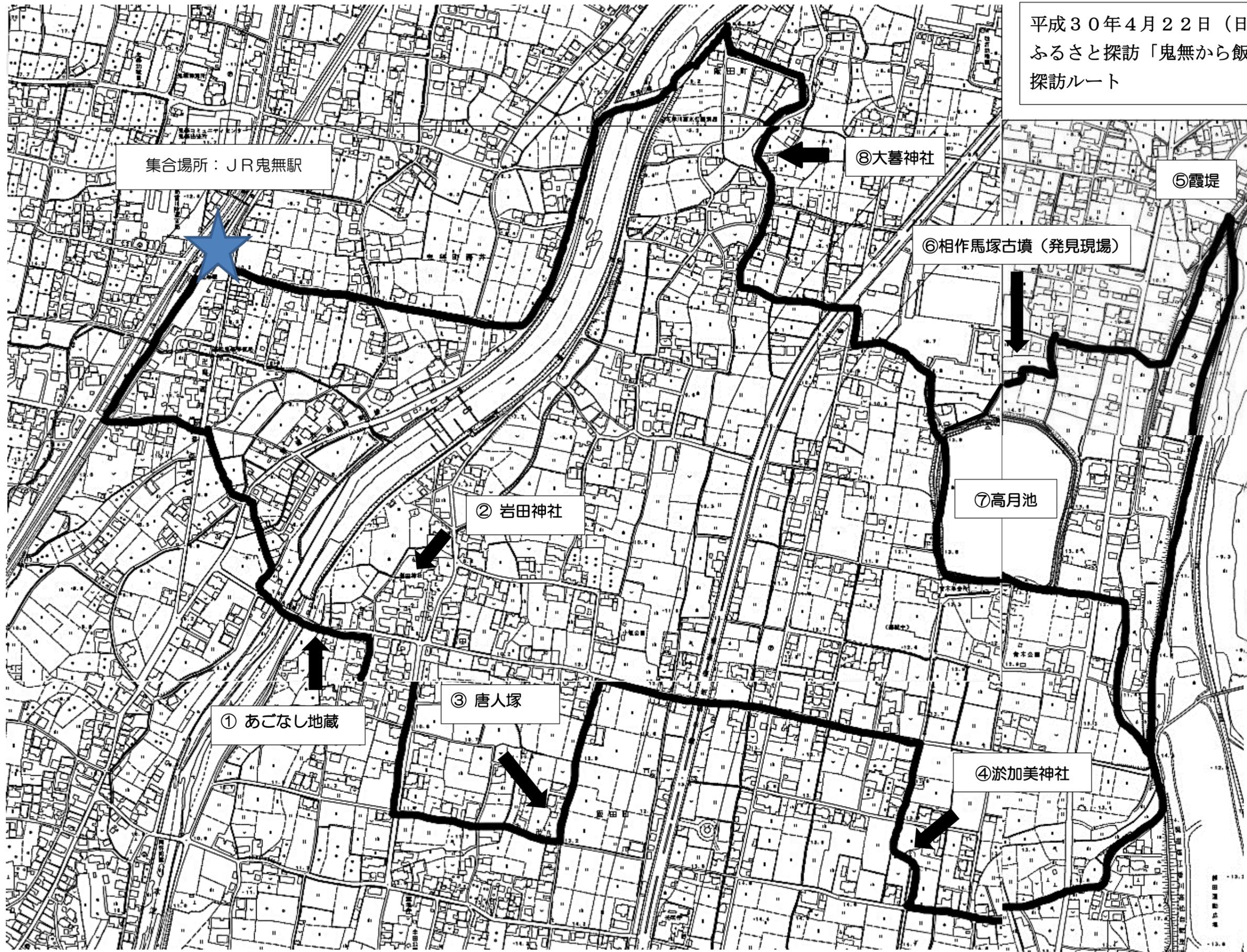
「弦打風土記」 一九六〇年

「郷土史事典 笠居郷探訪 第二版」 立山信浩著、二〇一四年

「古城跡を訪ねて」 秋山忠著、一九八二年

「口訳 全讃史」 一九九一年

平成30年4月22日(日)
ふるさと探訪「鬼無から飯田を歩く」
探訪ルート



集合場所：JR鬼無駅



① あごなし地蔵

② 岩田神社

③ 唐人塚

④ 湍加美神社

⑤ 大暮神社

⑤ 霞堤

⑥ 相作馬塚古墳(発見現場)

⑦ 高月池

4月22日（日）

- ◎行き JR予讃線（多度津行）
高松駅(9:14)⇒鬼無駅(9:21)
- ◎帰り JR予讃線（高松行）
鬼無駅(12:15)⇒高松駅（12:22）
鬼無駅(12:42)⇒高松駅（12:49）

次回のふるさと探訪は…

テーマ 「みろく自然公園周辺を訪ねる」（予定）

とき 平成30年5月27日（日）9：30～正午頃

集合場所 みろく自然公園入口付近駐車場（テニスコート横）

講師 松田 朝由さん（大川地区広域行政振興整備組合）

参加費 70円（入場料）※おつりの無いよう御準備ください

☆広報「たかまつ」5月15日号に開催案内を掲載しております。

☆小雨決行。当日、警報が発令された場合は、中止とします。

なお、中止かどうか御不明な場合、午前7時30分～9時30分に文化財課（Tel 087-839-2660）でお知らせします。

（電話が通じない場合は実施予定ですので、集合場所にお集まりください。）

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。